

平城宮出土磚について

はじめに 現在、2010年の竣工を目指して、平城宮の中核部ともいえる第一次大極殿院の復原工事が進んでいる。そしてこの復原には、当研究所による約40年間におよぶ発掘調査や研究の成果が利用される予定である。しかし第一次大極殿院の一部を構成し、大極殿前面に存在する磚積擁壁の所用磚については、今まで詳細な検討がなされたことはない。また宮内の各地区でも多数の磚が出土しているが、やはり同様の状況である。そこで本稿では、まず宮内の各所から出土する磚の形状・法量の傾向を検討し、その相違点等を把握したい。またその過程で、第一次大極殿院磚積擁壁所用磚の形状・法量の傾向を明らかにし、第一次大極殿院磚積擁壁復原に資するデータの提示をおこなうことも研究の目的としたい。

分析方法 分析の手順としては、まず平城宮内全体の傾向を把握し、その後に宮内各地区ごとの傾向差を調べる。形状把握の方法としては、岩石学の分野ではスタンダードなZingg (1935) の方法を採用する(図33)。この方法は、測定対象物の長さ、幅、厚さと、比率を元に、その形態を把握する方法である。しかし方法の性格上、図にも示すように、本来は直方体や立方体のような方体形状をなす物体の形態を判定するのに適した方法であり、磚の形状を示すには最適の方法といえる。出土磚の法量につい

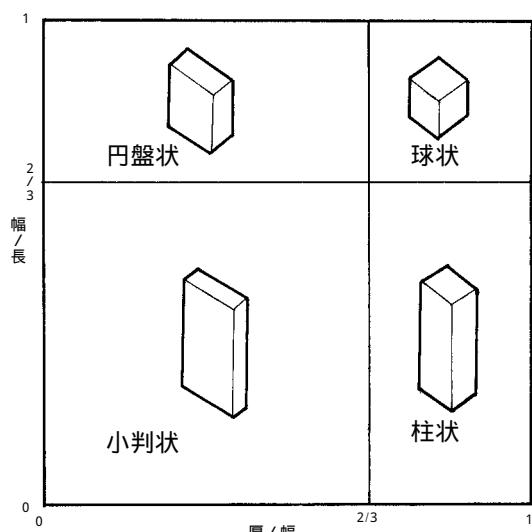


図33 磚の形状分類 (Zingg 1935)

ては、その長さ・幅・厚さを測定して、散布図などを使用してその分析結果を示す。

分析対象資料 平城宮では、第一次大極殿院地区、内裏地区、東院地区、内裏東方官衙地区、馬寮地区、東大溝周囲などから多くの磚が出土している。しかし、所属時期がある程度判明し、分析に耐えられる資料数を単独で出土している地区は、第一次大極殿院地区・内裏東方官衙地区、馬寮地区のみである。第一次大極殿院地区出土磚の多くは、磚積擁壁(SX6600)付近から出土した資料である。磚積擁壁の構築が奈良時代初頭であることから、所用磚の所属時期も概ねにその前後に位置づけられる(『平城報告 XI』)。一方、内裏東方官衙は、恭仁宮からの還都後の奈良時代後半期に、当初の掘立柱建物群から、磚積基壇礎石建物へと装いを新たにしている。その際に磚を新たに製作した場合、帰属時期は奈良時代後半と考えられる。しかし第一次大極殿磚積擁壁の磚を再利用したとする見解もある(町田 1986)。馬寮地区出土磚については、その多くが平安時代初頭、平城上皇の平城還都時に建てられた二面庇付南北棟建物(SB6401)の柱据付掘形の礎盤として用いられている。再利用の可能性を考慮しても、奈良時代後半～平安時代初頭期のものと判断される。

磚の形状 上記の方法に基づき、X軸に厚さ／幅(以後a値と呼ぶ)、y軸に幅／長さ(以後b値と呼ぶ)を示した領域に、出土磚の形態の位置をプロットした散布図(図34)を見ると、平城宮内出土磚は、a値0.3前後、b値0.9～1.0前後のAタイプ、a値0.3前後、b値0.7～0.8のBタイプ、a値0.4～0.6、b値0.5～0.6のCタイプの三つのタイプに分かれることがわかる。

次に出土地区ごと出土磚の形状の傾向をみると、第一次大極殿院地区と内裏東方官衙地区ではA・Cタイプの、馬寮地区ではBタイプの資料から構成されている。このうち、第一次大極殿地区のAタイプはb値が高い資料(分布幅0.97～1.0、平均値0.99)と、Cタイプはa値の高い資料(0.45～0.62、平均値0.53)で構成される。それに対して、内裏東方官衙地区のAタイプはb値の低い資料(分布幅0.90～0.94、平均値0.92)から、Cタイプでは、a値の低い資料(分布幅0.4～0.53、平均値0.44)によって構成され、第一次大極殿地区とは分布域が異なる。以上から、第一次大極殿・内裏東方官衙の両地区は共にA・Cタイプを

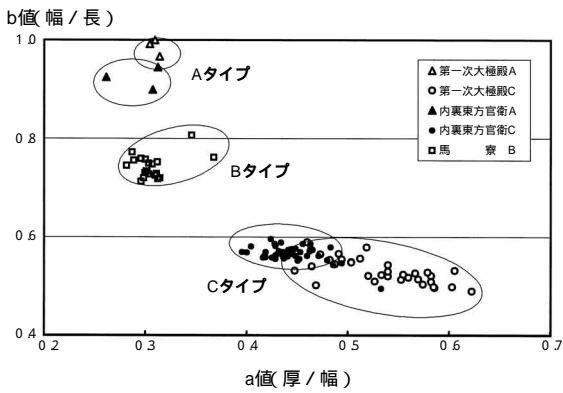


図34 平城宮出土磚の形状

組成するが、細部を検討するとその形状には差異が認められることがわかる。一方、馬寮地区では、a値平均値0.31、b値平均値0.74というBタイプの磚のみを出土し、その形状の傾向は、他地区に比較して著しく異なることがわかる。

磚の法量 次に第一次大極殿院地区、内裏東方官衙地区、馬寮地区出土磚の長さ・幅・厚さの傾向を前述の各タイプごとに述べる(図35)。まずAタイプについては、第一次大極殿地区出土磚の長さは26.5~27.0cmに分布し、平均値は26.77cmであり、内裏東方官衙は28.8~29.7cmに分布幅を持ち、平均値は29.17cmである。幅については前者は26.1~26.6cmに分布し、平均値は26.4cm、後者の分布幅は26.7~27.2cmで、平均値は26.90cmである。ちなみに、グラフは示さなかったが厚さについては前者は最小値8.1cm、最大値8.2cmで、平均値は8.17cm、後者はそれぞれ26.7cm、27.2cm、26.90cmである。

次にCタイプについてみると第一次大極殿地区出土磚の長さは概ね28.0~30.0cmに分布し、平均値は28.86cmである。内裏東方官衙は、分布幅29.2~31.9cmで、平均値は30.77cmである。前者の幅は14.0~17.4cmに分布し、平均値は15.29cm、後者の分布幅は15.2~18.4cmで、平均値は17.42cmである。厚さについては前者は最小値6.7cm、最大値9.2cm、平均値は8.14cm、後者はそれぞれ6.8cm、8.5cm、6.96cmである。最後に、Bタイプのみから構成される馬寮出土資料についてみると、長さは、28.9~31.8cmの分布幅をもち、平均値は30.50cmである。幅については、本地区出土資料のすべてがBタイプであることを反映して、分布幅は21.3~24.6cm、平均値は22.65cmである。厚さは、概ね6.4~8.9cmの分布をもち、平均値は6.96cmである。

以上をまとめると第一次大極殿地区・内裏東方官衙地区双方のA・Cタイプで差が認められる。Aタイプでは、第一次大極殿地区出土磚の法量(いずれも平均値)は、長さ26.77cm、幅26.40cm、厚さ8.17cm、内裏東方官衙地区

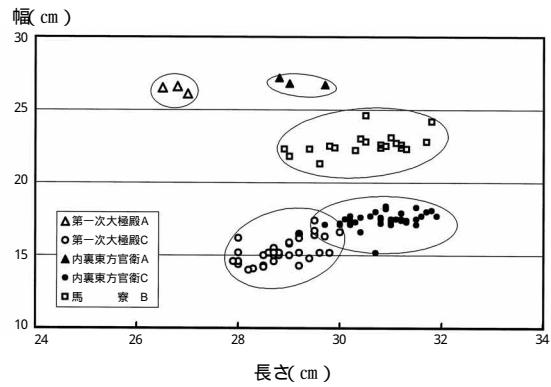


図35 平城宮出土磚の法量

出土磚は、長さ29.17cm、幅26.90cm、厚さ7.90cmである。Cタイプでは、第一次大極殿地区出土磚の法量(いずれも平均値)は、長さ28.86cm、幅15.29cm、厚さ8.14cm、内裏東方官衙地区出土磚は、長さ30.77cm、幅17.42cm、厚さ7.73cmである。A・C両タイプ共に、内裏東方官衙地区に比較して第一次大極殿出土資料の長さ・幅は大きく、対照的に厚さが小さい。

まとめ 以上から、第一次大極殿地区と内裏東方官衙地区では双方共にA・C両タイプの磚を出土するが、その形状・法量の傾向は全く異なるものであることは明らかである。このことから、内裏東方官衙(磚積基壇建物)に使用された磚は、少なくとも第一次大極殿院磚積擁壁所用磚を再利用したものではありえず、恭仁京からの還都後に新たに製作されたものといえる。

一方、奈良時代後半～平安時代初頭に位置づけられる馬寮出土Bタイプ磚の長さは、内裏東方官衙出土Cタイプ磚の長さと極めて近似した傾向を持っている。また今回、出土資料数が少ないため分析対象とはしなかったが、恭仁宮から出土する磚の法量は概ね29cm前後であり、第一次大極殿出土Cタイプ磚に極めて近似している。これらを合わせて考えると、第一次大極殿院地区と内裏東方官衙地区出土磚の形状・大きさの傾向差は、単に磚を焼成した窯の差だけによるものではなく、時間的変化に基づく可能性を考えることができる。つまり恭仁宮からの平城還都を境として奈良時代前半期と後半期を比較した場合、A・C両タイプ共に長さ・幅は増加傾向、厚さは減少の傾向にあり、それにともない各タイプ内で、長さ・幅・厚さにより規定される形状の変化もおこった可能性が高いといえよう。

(渡辺丈彦)

参考文献

- 町田章1986『平城京』考古学ライブラリー44、ニュー・サイエンス社。
- Zingg, Th. 1935 Beiträge zur Schotteranalyse. Min. Petrog. Mitt. Schweiz., 15, 39 - 140.